

1999年度 夏休み親子城郭講座
 「兜をつくる」

兜は1日にして成らず



鉢の製作

姫路の明珍家といえば、もと甲冑師である。現在は「明珍火箸」なる名工芸品を主に作っていることはよく知られている。明珍家は相模国小田原城下にもあって、その子孫ははまだ甲冑師として生き永らえているという。そうした旧城下の伝統なのか、小田原では「うさぎ亭」なる甲冑製作ボランティアが活動しており、ここ数年、テレビや雑誌で採り上げられることもしばしばである。勿論、甲冑製作といっても本物ではなく、段ボールを利用して作るものである。段ボール製の甲冑とはいえ、かなり手の込んだものである。城郭研究室では例年、夏休みの時期に「親子城郭講座」を行ってきた。内容としては主に姫路城内の見学であった。今年度は「ウエルカム21」の関係で似たような企画がイベントとして開催されるので、従来の見学を止めようと考えていたところ、小田原の活動事例をインターネットで知ることができた。「うさぎ亭」では、甲冑製作基本となる設計図、すなわち型紙もEメールで無料配信しているので、それを利用した親子講座を今年度は計画してみた。

(1999.7.31 日本城郭研究センター 参加30名)

まずは予習。型紙の配信を受け、製作手順を読んで早速製作にとりかかる。大人が被れる大きさであるから、鉢でも直径が40cmになる。さらに鉢にとり付く鉦(しころ)は、それよりも直径が大きくなるので、必要な段ボールも家電、とくに大型テレビや冷蔵庫などのものに限定される。今回は関西器具さんにご協力いただき、大きめの段ボールを提供していただいた。

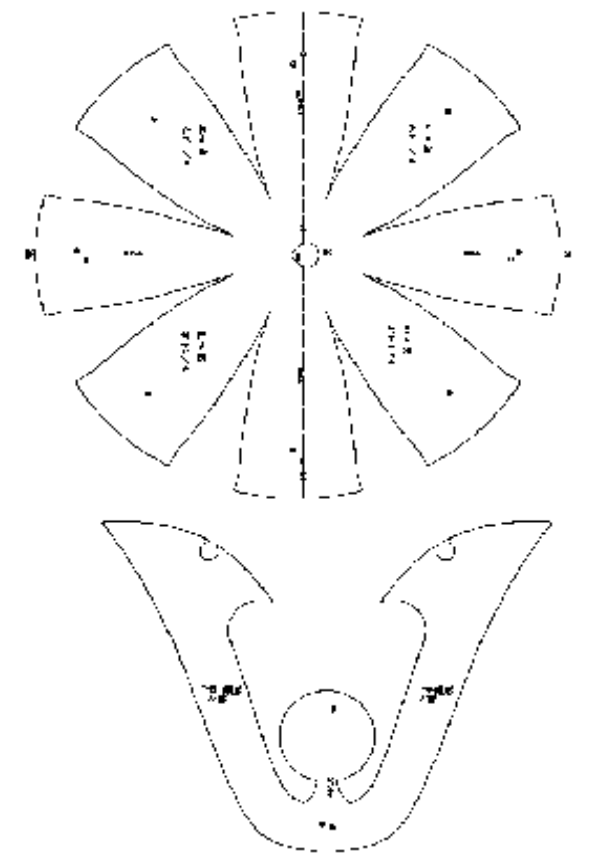
段ボールに型を写して裁断するが、家電の納まっていた段ボールは厚く、大人でも裁断するのに力が必要となる。

裁断した各パーツは、水に濡らしながら曲げて形をつけていく。その上から反故紙を貼り、彩色する。本来ならばタイガージョイントセメントを塗り、乾燥後磨いてペンキを塗るらしいが、ここでは水彩とした。その理由は、小学生の持っている道具を使うことと、汚れを気にせず思いきり工作のできる空間が日本城郭研究センターにはないためである。これからの文化施設には、講義室のほかにこうした工作も可能な空間(水や火、土なども扱える)が必要となる。

彩色が済んで乾燥したら、鉢、吹返、鉦、鍬形、眉庇(まびさし)を付けて完成させる。これが結構、手間がかかる。というのは、最も重要な鉦と鉢は「付ける」のではなく紐で「結ぶ」からである。「結ぶ」という日本文化の基本を意外と忘れていたことをここで実感する。



こちらで用意した型紙を使って、段ボールに形を写しているところ。幅の狭い会議用机の上よりは、床での作業が適当だった。



最後は記念撮影。参加者に配る。

縮小サイズの型紙(鉢と鍬形)。胴や籠手、臍当もある。



"Shiro Fumii" No.6 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.

「城踏」の様子